

任せて任せず

2022.7.6

いろいろな本を読んでいると、松下幸之助さんの名言に出会うことがある。先日は「任せて任せず」に出合った。なるほどと思った。

松下幸之助さんは、従業員に仕事を与えるとき、その長所を見て、仮に経験や実績がなくても、潜在能力を信頼して大胆に仕事を任せてきた。そのために多くの人が育った。これには、松下幸之助さんが病弱で、個人経営の時代から人に仕事を任せざるを得なかったという事情も影響している。

仕事は任せる。しかし、任せっ放しではいけない。適時適切に報告を聞き、助言を与えなければならぬ。それが、責任者の務めである。事実、松下幸之助さんは病床に部下を呼び、報告を聞き、指示を与えることも少なくなかったという。ただ任せてあとは知らないというのではなく、任せたあとも見守り、その人が自分の力で成功するまでフォローを続けることが必要である。

なぜ、この言葉になるほどと合点がいったのか。今年度の野田中学校では、私が先生方の仕事分担を決めた。もちろん、決めるまでには相談や話し合いもあった。だが、最終的には私が先生方に「任せた」のである。

だからといって、「あとは任せた、よろしく頼む」ではない。いつも、先生方一人一人のことを気にかけている。特に、転勤してきた先生方と20代カルテットの4人である。「大丈夫だろうか。困ってはいないだろうか。疲れてはいないだろうか」と心配はしながらも、しょっちゅう声をかけるわけではない。4人には、それぞれ課題を与えてある。期待を込め成長を願ってのことである。

声をかけるタイミングが重要である。任せたわけだから、いかにも、「あなたのことが心配です」と言わんばかりに声をかけるのは避けたい。見ていないようで見ている。そして、そろそろかという頃合いを見て声をかける。

20代の4人は、それこそ毎日気にかかる。4人ともよくやっている。感心するばかりである。すばらしいところは、思いっ切りほめる。心からほめる。すると、こちらもうれしくなる。自然とそうなる。

仕事をお願いすると、「やったことはありません」という方がいる。それはそうだろう。たいていの仕事は、やったことがない初めてのものが多いためである。それでも、頼むほうは、できるであろうという見込みと期待でお願いしている。「頼まれごととは試されごと」という言葉もある。

一番いいのは、何でもとりあえず「ハイ、ハイ」と返事をしておくことである。ノーと言わないことである。嫌ですなどとは言わないことである。だが、実際には、「できません。無理です」という方もいる。せっかくの成長の機会なのだが、もったいないと思うこともある。

任せた以上は、成功するように、見守りながら、フォローしながら、ときには責任をとりながら、自分の力でうまくいったと思えるようにもっていかなければならない。「任せて任せず」人材育成の妙味であり醍醐味である。